

最終報告書

1. 事業の概要

事業名	ボッチャを使った復興支援&障がい者連携				
開始日	2017年1月1日	終了日	2017年12月31日	日数	365日間
団体名	(一社) Arts and Sports for Everyone		担当者名	吉田 祐一	

総額(税込)	1,450,000円	スタッフ人数	10人
--------	------------	--------	-----

事業目的	<p>年齢や障がいにかかわらず誰もが参加できるユニバーサルスポーツ「ボッチャ」を通じて、仮設住宅住民の交流促進と孤立化防止を実現する。そして、障がい者支援団体の連携促進を含め、誰もが生きやすい共生社会を目指す。</p>
事業背景	<p>東日本大震災では、仮設住宅に移り住んだ後、周りとの接触がなくなり、5年間で200人近くが孤独死したという数字がある。その教訓から、熊本県内の仮設団地には集会所や談話室が作られ、すべての仮設住宅には縁側が作られている。ただ、避難されている方々が主体的に活動する機会がなくては、住民間の交流は生まれにくい。そこで、その道具としてユニバーサルスポーツである「ボッチャ」を貸し出し、必要な時に集まって楽しみ、ストレスを発散し、交流を深める一助にしたいと活動をしてきた。</p> <p>同時に、障がい者スポーツに慣れ親しむ機会として、障がいのある人とない人との交流が自然にできるのではないかと考え、地震後1年前後を目安に、交流できる大会を設定し、本団体の目指す“共生社会”実現への足掛かりとしたい。</p> <p>また、今回の地震で、障がい者をはじめとする弱者が避難所でつらい立場に置かれる事例が多かった。例えばじっとするのが苦手で、飛び跳ねて奇声を発することの多い自閉症の子ども親は、避難所に行くことをあきらめて、危険を承知で自宅にとどまったり、避難所に行っても炊き出しの列に並べず、事情を話しても並ばないとだめだと言われて困ってしまい、避難所を出ていった家庭も多くあった。福祉避難所もあったが、認知度は低くて数も少なく、親戚や知り合いに世話になる避難者が多かった。このような課題に障がい者やその家族だけで対処するのは困難なため、障がい者支援団体がサポートすべきだったが、障がい者団体間の連携不足が原因で、何も動きを取れなかった。そこで、まずは障がい者スポーツ団体同士の連携を深める契機となるようなフォーラムの開催が求められている。</p>
事業内容	<p>1. 「ボッチャ」を通じた仮設住宅住民の孤立化防止支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仮設団地等にボッチャの貸出し ・ 学校へのボッチャの貸出し

	<p>2. 仮設住宅住民と特別支援学校との交流事業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仮設団地でのボッチャ交流会 ・ 益城町の小学校でのボッチャ大会 ・ ボッチャのルールやプレイについての講習会
	<p>3. 障がい者復興スポーツフォーラムの開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回の地震で露呈した弱者への理解不足の解消 ・ 障がい者スポーツ団体同士の連携を深めるフォーラムの開催

2. 事業の評価（評価者：公益財団法人佐賀未来創造基金・山田健一郎）

最終評価実施日：2018年2月25日

(a) 妥当性：事業開始当時の状況やニーズに合致していたか、事業実施のタイミングはよかったか

【コンポーネント①】

- 開始時期は震災後の約1年経過したところで、仮設住宅の方々もようやく通常の生活状態を少し意識できる時期にあり、種をまく時期としては概ねよかったと思われる。事業自体の浸透性や個別のケースを考えると「もう少し落ち着いてから始めたほうがよかったかもしれない」と実施団体自体も振り返っていることから、コミュニティ支援のタイミングは仮設住宅の年齢構成を含めた状況やその地域ごとの文化や災害被害の状況、そして、人的リソースなどを考えると非常に個別性が高くデリケートで難しいと感じ取れた。結果論だが、足掛かりとしては、支援団体への説明や無理強いをしない丁寧なコミュニケーション手法とボッチャというツールを活用して、しかも寄贈ではなく貸出しという戦略的な狙いをもって取り組んだことで、表面には出しづらい仮設住宅の悩みやニーズを聞くことができた。
- 結果としてできていたが、可能ならば仮設住宅のニーズ調査などを行いながら貸出しをしていくことができれば事業の成果向上につながるのではと感じた。

【コンポーネント②】

- 仮設住宅の方々の参加が少なかったという反省点があった。
- 前述の仮設住宅のニーズ調査ともつながるが、ニーズは感じ取れたものの田植えなどの地域のバックグラウンドを把握しきれていなかったため、仮設住宅からは1カ所の参加となった。

- しかしながら特別支援学校関係者からは「外部とのコミュニケーションの素晴らしい機会だった」と評価され、学校側のニーズには応えられる機会になったと思う。
- 毎年実施してほしいという声も多かったため次回開催も予定しているとのことで、継続という意味でも意義があったと思う。次回開催は今回の反省材料を基に更により機会にしていきたい。

【コンポーネント③】

- 100名を超える参加者だけでなく学生を含めたボランティアの方々の多さも際立ったフォーラムだった。
- 障がい者をはじめとした共生社会の実現と復興支援というニーズとタイミングがマッチした事業だったと感じた。
- メディアにも大きく取り上げられて熊本という地域でこれから必要な活動ということを認知されている事業だったと感じた。

(b) 有効性：目的の達成率

【コンポーネント①】

- 当初の想定と比較しても、110カ所の団地の約2割、65カ所団地のある集会所の3割にポッチャを貸出すことができたことは、今後の広がりに向けて有効だったと考えられる。
- 今後の事業継続や関わり方などが課題として残るため、現場や団体の状況を含めて整理していったほしい。

【コンポーネント②】

- 仮設住宅の方々と特別支援学校との交流は、田植えなどの地域行事とも重なり参加者が少なくなり、達成しきれていない部分もあったが、特別支援学校側からは非常に好評で、双方の交流のための前提条件の確認と新たなニーズを可視化でき、今後の財産になる。

【コンポーネント③】

- 参加者やボランティアなど関わる方々も多く、その後のメディアからの発信も多かったことから、フォーラム自体の目的は達成していたと考えられる。
- 基調講演やパネルディスカッションでは障がい者スポーツの課題と展望を知る良い機会になり、熊本においてどう進めていくかを考え深める機会になっていた。

- 体験会の参加者は想定していたほど多くはなかったが、熊本県副知事などもプライベートで体験されて、今後の熊本県における障がい者スポーツをはじめとした政策に良い影響があることを期待したい。

(c) 効率性：インプットに対してアウトプットがどれくらいあったか、手法は正しかったか

【コンポーネント①】

- ボッチャ用品貸出しという視点は正しかった。実質的に寄贈だが、敢えて寄贈ではなく関係性をつなぐために貸出しという名目で行うことでコミュニケーションを重ねて関係性構築を創っていく手法は良かった。
- 仮設住宅の方々のニーズ調査とボッチャ指導者がいないと実施できないことから継続的なかかりを持つための体制整備の必要性を感じる良い機会になった。
- 被災地にとってのコミュニケーションツールとしてのボッチャの可能性と価値、そして「場」を創る必要性を確認する良い機会になった。

【コンポーネント②】

- 地域事情や仮設住宅住民のニーズ調査をすることでアウトプットは更に高まると思われる。
- 特別支援学校側からも大変好評で外部と交流する良い機会になったとのことだった。
- ボッチャをはじめ、音楽や食事など多様な交流の機会を創ることで団体本来の目的であるアートやスポーツなど誰もが関われる状況を創れたことは手法も概ね正しく、アウトプットもあったと思われる。

【コンポーネント③】

- 民間主導のフォーラムとしては成功だったのではないかと思う。
- 大学とうまく連携して学内開催をしたことで参加者だけでなく学生ボランティアなどをうまく巻き込み展開できたことは今後の広がりを期待できる。
- メディアからも広報としてだけでなく、連携事業として広がりを見せていることが素晴らしいと思う。

(d) 調整の度合：いかに被災地コミュニティと連携できていたか、終了時のタイミングや方法はどうか

【コンポーネント①】

- 最初のニーズ調査などの必要性を感じてはいるものの、ボッチャの貸出しなどの機会を通じて真摯に向き合い信頼関係を築けていたように感じる。
- ボッチャのレンタルは今回までで、限られた期間のプロジェクトであるが、これからが活用の機運も高まりフォローアップが必要になるプロジェクトだと思うので継続したお互いに無理のない活動を続けてもらいたい。

【コンポーネント②】

- 関係性は良好だったものの地域行事である田植えの時期と活動が重なったことで当初意図していた仮設住宅の参加者が少なかった。しかしながら特別支援学校からの生の声や今回の経験を活かして次回につながる活動になっている。
- 現場からの開催やボッチャ貸出しなどのニーズも多く捉えることができ、次回開催やボッチャ貸出しの可能性も模索していることから今後も後に期待したい。

【コンポーネント③】

- 吉田代表の高校教員としての人脈や関係者の尽力もあり熊本県立大学との連携が非常にうまくいっているように感じた。
- 大学構内施設の数カ所を借りてのイベントでは大学生ボランティアも多かった。イベント自体も地域のニーズを反映しているので参加者も多かったが、規模が大きくなると参加者などのマッチングやコミュニケーション機会を増やすための個別フォローがどうしても薄くなりがちなので振り返りの視点として持っていただければ更に良い機会になると思われる。
- フォーラムの参加者は多かったが、天候が悪く、体験会の参加は少なかった。資金面や団体基盤強化などの課題もあるが、次回開催が期待される活動であるので、行政やメディアなどとも更なる連携をとってぜひ頑張っていたきたい。

(e) 波及効果・インパクト：当初の目的以外に得られた効果、課題

【コンポーネント①】

- 仮設住宅へのボッチャの貸出しは関係性を創るためのツールであったが、思った以上にボッチャそのものに関心を持つ人が多く、広がりを見せている点が良かった。
- 今後はフォローアップも含めてルールなどを含めて解説できるコーディネーターのような指導者の存在が現場に必要なと思われる。
- 今後の関わり方が復興支援のみならずボッチャの普及拡大を考えると非常に大切になってくる。

【コンポーネント②】

- 当初は仮設住宅の方々と特別支援学校の子どもたちをつなげるという目的だったが、特別支援学校の先生をはじめ関係者から、普段なかなかボッチャのような体験と外部の方々と一緒に実施する活動が少なく今後もぜひ継続して活動してほしいという現場のニーズがわかったことが非常によかった。
- 今後は、団体としての体制整備や財源などが課題となる。

【コンポーネント③】

- 当初の目的は仮設住宅や特別支援学校など被災者や障がい者などを対象にした活動であったが、今回の活動を通じて、テレビ局や各メディアにも大きく取り上げられて協力いただけることになり 24 時間テレビなどで効果的に広がったことで、仮設住宅や特別支援学校だけではなく、街なかや鑑別所、LGBT との連携などにも現在広がっている。
- 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けてボッチャというスポーツの広がり可能性を感じる。
- 今後の課題としては指導者の養成をはじめ、行政・企業との協働、メディアとの更なる連携など団体の基盤強化と連動した活動を一般の方々へ広げていく戦略が必要になる。

(f) 新規性・独自性：新しいアイデアや工夫が取り入れられているか、他被災地のモデルとなり得る事業か

【コンポーネント①】

- 仮設住宅への寄贈ではなく貸出しをすることで、訪問機会とコミュニケーションの積み重ねが増えて、結果として関係性を構築する良いツールになっていた。
- 貸出しを受けた仮設住宅の住民側も自分たちのタイミングで必要に応じて活動できることから、今後の他被災地でのモデルになる可能性は示せたのではないかと思われる。

【コンポーネント②】

- 直接的に新しいアイデアや工夫点で他被災地のモデルになることは難しいかもしれないが、被災した際の障がい者などへの視点や相互の助け合いなどを考える良い機会になると思われる。

【コンポーネント③】

- 他被災地でも障がい者や要援護者への視点は必ず必要になる。地域ごとのニーズや対策などの状況が違うので上記と同様に一概に他被災地のモデルになる事業とは言い切れないかもしれないが、地域の機運やニーズを捉えて今回のようなフォーラムを行うことは、非常に有効なコミュニティづくりや視点づくりの機会になると思われる。

3. 評価者の所感

事業は計画していたことが、目的の達成を含めて概ね実施されていたので順調だったように感じられる。中長期的なニーズとしては高いが、緊急支援ではないので支援団体からの優先順位も低くなりがちな、孤立を防ぐためのコミュニティ支援という部分をボッチャ貸出しというスポーツを通じてアプローチしていく手法は効果的だったと思われる。ボッチャそのものの可能性や被災地におけるスポーツコミュニケーションの重要性もコミュニティ形成や復興していくうえでの一つのツールとして有効だったように感じられる。

今後の展開としては、仮設住宅へのフォローアップをはじめ特別支援学校や大学とも更なる連携をしながら戦略的に拓げていく計画などが必要になってくる。こども親善大使やアプリ開発、そしてボッチャタウン構想などこれからの計画を準備している点からも、今後の展開が期待できる。構想実現のために団体そのものの財源などを含めた組織基盤強化や人材育成などが課題となってくる。

今回の活動を通じて、ボッチャの可能性、体験会の効果、メディアや行政などとも連携の機会をつくれたと思うので、今後の企業や行政との更なる協働に向けて期待したい。